

運動部活動における「殴られ役」についての研究

－スケープゴート論を手掛かりとして－

島田 健次 (筑波大学)

1. 目的

本研究の目的は、運動部活動において、指導者から「殴られ役」への体罰がなぜなくなるのかを明らかにすることである。

2. 方法

まず、運動部活動において、指導者から特定の選手をターゲットに体罰が行われているという実態を示す。次に、スケープゴート論を手掛かりとして、指導者が特定の選手に対して体罰を行う意味を考察する。そして、「殴られ役」への体罰が、集団に与える影響を検討する。

3. 本論の概要

はじめに、運動部活動の現場で起きている実際の問題を把握するために、2012年桜宮高校バスケットボール部の体罰事件についての詳細を確認した。島沢(2014)によれば、自殺した生徒は、顧問から体罰のターゲットにされ、理由が明確ではないにもかかわらず、体罰を受けていたことが確認された。また、先行研究では、「殴られ役」になったことがある学生が一定数存在していることが示されてはいるものの、詳細な検討はなされてこなかった。したがって、本研究では、指導者からの体罰のターゲットとなる選手のことを「殴られ役」とし、なぜその体罰がなくなるのかを明らかにすることを試みた。

そのための視点として、スケープゴート論を検討した。スケープゴート現象と「殴られ役」への体罰には、①責任主体が不明確な段階で原因帰属が行われ、②非難や攻撃といった行為が集団に共有されている、という共通の性質が認められた。

このスケープゴート論を援用し、「殴られ役」への体罰を検討した結果、指導者は自身のコントロール感の回復のために体罰を行っているということが明らかになった。コントロール感とは、自分のまわりに起こることを自らの意思によって管理しているという感覚のことである。このことから、指導者は運

動部活動で起きた出来事を自らが管理しているという感覚を得るために、「殴られ役」に対して体罰を行うことが明らかになった。特に、権威主義的性格の指導者は、コントロール感の回復のために、選手に対して合理的ではない原因帰属を行うという問題が示された。そのため、指導者には、自らの行う原因帰属が誤っている可能性を考える姿勢が求められる。

「殴られ役」への体罰は、運動部活動という集団があってはじめて起こるため、それが集団に与える影響を検討した。スケープゴート論では、集団にとって影響力のある者がスケープゴートに選出されやすいという特徴が示されている。実際、運動部活動においても、桜宮高校の事例のように、主将が代表して体罰を受けることが少なくない。なぜなら、集団に対して影響力のある選手に体罰を行うことで、集団の秩序を維持することができるからである。したがって、「殴られ役」に対して体罰を行うことは、チームの「和」を乱した選手に行う直接的な体罰よりも、少なくとも集団の秩序を維持するためには効果的だということが明らかになった。

4. 結論

これらの議論を踏まえて、指導者から「殴られ役」への体罰がなくなる2つの理由が明らかになった。1つ目は、「殴られ役」への体罰が、指導者自身のコントロール感の回復に役立っているからである。2つ目は、集団の秩序を保つためには、直接的な体罰よりも「殴られ役」への体罰の方が効果的であるからである。

5. 主要参考文献

- 1) 釘原直樹(2014) スケープゴート現象の定義とメカニズム, 対人社会心理学研究, 14: 1-15.
- 2) 島沢優子(2014) 桜宮高校バスケット部体罰事件の真実: そして少年は死ぬことに決めた, 朝日新聞出版.